華麗な個性 存分に表現

音楽監督・指揮 アントニオ・パッパーノに聞く

指揮するアントニオ・パッパーノ＝写真 ROH/Sim Canetty-Clarke

日本公演を指揮するのは2002年から音楽監督を務めるアントニオ・パッパーノだ。1959年、イタリア人の両親のもと英国に生まれた。父親は声楽教師。10歳で生徒たちのピアノ伴奏を始め、教会やバーでも演奏するなど音楽とともに育った。歌劇場の練習ピアニストで腕を磨いた実力派。世界のオペラハウスを席巻し、次代の巨匠と目される。

――オペラ指揮者として長年キャリアを積んできた。

力強い音楽で説得力を

「私は劇場の住人。幼い頃から歌手と音楽に囲まれて育ってきた。私にとって、音楽の劇的な要素はとても意味があるもの。オペラでも個性が強いものが好きだ」

――音楽監督に就任して10年あまり。今、あなたにとってロイヤル・オペラとは。

「音楽面での『我が家』のようなものだ。大勢がいつも一緒に仕事をしていて、まさに大所帯の家庭のような雰囲気がある」

「特に素晴らしいのは、一緒に豊富なレパートリーを作り上げてきたこと。例えば『ドン・ジョヴァンニ』や『マノン・レスコー』は本来、ロイヤル・オペラにとってスタンダードなレパートリーだが、演奏したのは実に30年ぶりだった。標準レパートリーの作品をよみがえらせたことは最高の喜びだ」

――日本公演の演目に「ドン・ジョヴァンニ」「マクベス」を選んだ理由は。

「『マクベス』は私の大好きな作品。4年前にサイモン・キーンリサイド、リュドミラ・モナスティルスカと素晴らしい上演を実現したので、今回もいいものになると考えた。フィリダ・ロイドの演出は非常に暗く、英国の舞台の優れた伝統をくんでいる。力強いシンボルが盛り込まれ、実に説得力ある形で音楽に語らせている」

――歌手についてはどう思うか。

「キーンリサイドの声は年月を重ねて円熟味が増してきたので、このオペラを歌うのにふさわしい。彼は、単に優れた舞台俳優であるだけでなく、良い意味で全く予想を超えた人物。彼の姿からは常に何かが学べる、そういう芸術家だ」

「一方、モナスティルスカの歌唱テクニックは、かつてのオペラ黄金時代を思い起こさせる。難なく高音を出せ、うっとりするほど柔らかい歌声も出せる。マクベス夫人役にはある種の残忍さや気性の激しさを表現する能力が求められる。それができる歌い手はかなり限定されるが、彼女なら間違いなく可能だろう」

「ドン・ジョヴァンニはオペラで最も重要なキャラクターの一人。観客はドン・ジョヴァンニがどういう人物か、自分が正確に把握していると思って劇場にやってくる。『カルメン』や『椿姫』と同じようにね。だから完璧ではないとがっかりする。（演出家や演奏する側にとっては）難しいが、挑戦しがいがある」

「カスパー・ホルテンの演出は、プロジェクションマッピングを巧みに生かしながら、場面ごとに特徴ある雰囲気を見事に創り出している」

「ドン・ジョヴァンニ役とレポレロ役には、イルデブランド・ダルカンジェロとアレックス・エスポージトという2人のイタリア人を起用した。2人の冗談の掛け合いやレチタティーヴォ（朗唱）の出来栄えは見事。彼らと一緒にできることが心から待ち遠しい」

「ドンナ・アンナ役のアルビナ・シャギムラトヴァは実にエネルギッシュ。極めて高い技量が求められる役で、この役に本当に適した人でなければ務まらない。彼女はあらゆる面においてこの役にふさわしい」

「ユリア・レージネヴァは個性的なオペラ歌手で、愛らしいツェルリーナにぴったり。この演目では、全員がすべて的確にこなし、さらに集団としての持ち味を引き出すことが非常に大切で、今回はそこも成功すると思う」

「マクベス」に出演するキーンリサイド㊧とモナスティルスカ＝写真 ROH/Clive Barda.2011

マクベス

若い頃からシェイクスピアを敬愛し、作品をいくつもオペラ化したヴェルディ。「マクベス」は1847年、33歳の年に書いた。「ナブッコ」「エルナーニ」などで名声を確立した後、初めて挑んだシェイクスピア作品でもある。

舞台は1040年のスコットランド。国王のダンカンに仕える武将のマクベスとバンクォーは戦地からの帰途、荒野で3人の魔女に出会い、予言を受ける。マクベスは領主となり、やがては王になるだろう、と。

直後、実際に領主となったマクベスは妻に魔女の予言を伝える。妻にそそのかされて王を暗殺し、ついにスコットランド王に収まるが、欲望は行き着く先を知らない。魔女のもう一つの予言、「バンクォーが王の祖先となる」が気になり、バンクォーとその息子の命も狙う。

悪行を重ね、追い詰められていくマクベス。責め苦に耐えきれず、精神の均衡を崩すマクベス夫人。転落する2人を待ち受けているのは非業の死だった。

緊迫感みなぎるこの悲劇をヴェルディは緻密な管弦楽で描いた。衣装や照明などにも細かく指示を出し、100回以上もリハーサルを繰り返したという。

並々ならぬ愛着を持ち、初演から18年後の1865年には改訂版を上演。今回の公演では改訂版を用いるが、初演版にしかない絶唱「マクベスの死」が挿入される。

演出は映画「マーガレット・サッチャー　鉄の女の涙」の監督も務めた英国人フィリダ・ロイド。暗い色調を用いたシンプルな舞台で、登場人物たちの心情を際立たせる。

4年前、ロイヤル・オペラの公演で、マクベス夫妻役の鬼気迫る表現を見せて大成功を収めたキーンリサイドとモナスティルスカ。そして、華麗な管弦楽を引き出したパッパーノ。同じ顔合わせでの日本公演が実現する。

フィリダ・ロイド演出の「マクベス」の舞台＝写真 ROH/Clive Barda.2011

悪に染まる夫婦の悲劇

伝統と現代 心躍る共演

英国が誇るオペラの名門、ロイヤル・オペラの日本公演（日本経済新聞社、日本舞台芸術振興会主催）が9月12～21日、東京で開かれる。上演するのは「マクベス」「ドン・ジョヴァンニ」の2作。注目の指揮者、アントニオ・パッパーノが音楽監督として5年ぶりの日本公演を率いる。（文化部　関優子）

ドン・ジョヴァンニ

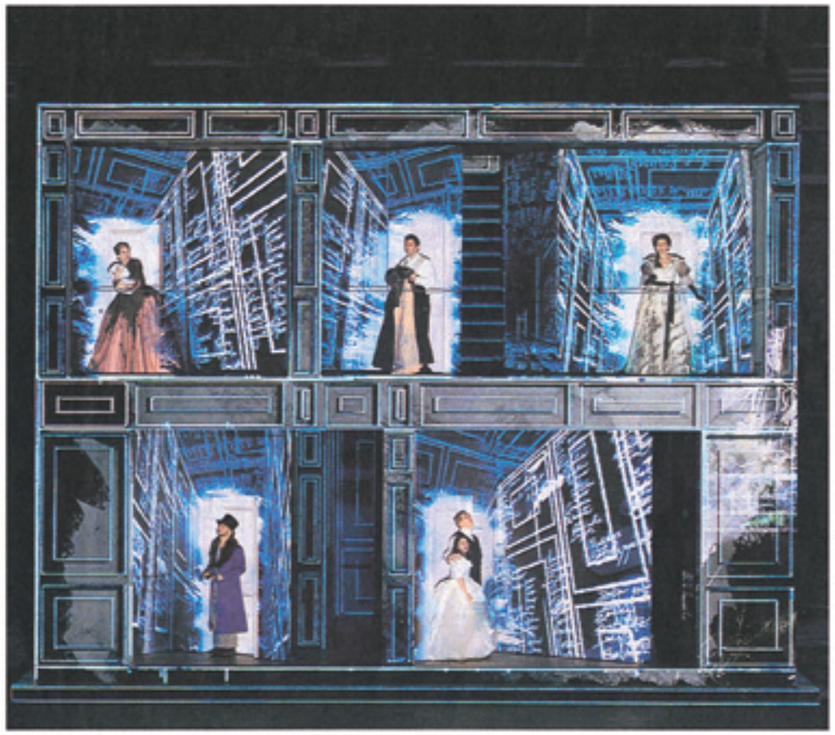
ロンドン公演ルポ

虚構へ誘う 不思議な空間

2014年2月中旬のロンドン。冷たい雨の中、コヴェントガーデンへと急いだ。シャップやレストランが軒を連ね、活気に満ちた街を代表するように建つのが、280年以上の歴史を誇るロイヤル・オペラだ。20世紀末に大改装を施し、伝統と現代が共存する洗練された空間として生まれ変わった。

その日の演目は、2月1日に初日を迎えたばかりの「ドン・ジョヴァンニ」（モーツァルト作曲）。新制作の演目だけあって、4階まで観客でびっしり埋まっている。

さっそうとした序曲に乗り、幕いっぱいにCG映像が流れる。空間の形状に合わせて映像を投射するプロジェクションマッピングと呼ばれる技法で、近年、ライブなどで盛んに使われるようになった。黒字の幕に、白い手書きの文字が次々描かれては消えていく。目を凝らすと人名のようだ。どうやら、色男のドン・ジョヴァンニがものにしてきた女性のリストらしいと分かり、思わず笑いが漏れた。



「ドン・ジョヴァンニ」の舞台。プロジェクションマッピングで迷宮のように映る（写真上）。エッシャーの絵を思わせる装置（同下）＝いずれも写真　ROH/Bill Cooper,2014 for Don G.

幕が上がってまずジョヴァンニの従者レポレロが登場した。歌うのは日本公演と同じく、アレックス・エスポージト。好色な主人にあきれ、愚痴をこぼす。ひょうひょうとした風貌で、自然におかしみを漂わせる演技が見事だ。

色事師の貴族ジョヴァンニは騎士長の娘ドンナ・アンナの寝室に忍び込むが追い出され、娘を助けに現れた騎士長を殺してしまう。そこから物語は展開する。逃げ出すジョヴァンニとレポレロ。だが懲りないジョヴァンニは、逃げ道でも女を誘惑する。それはかつての恋人ドンナ・エルヴィーラだった。

さらにその後、農民マゼットと村娘ツェルリーナの結婚式に出くわし、花嫁にも秋波を送る。村人たちに囲まれ、あまりの行状について詰め寄られた揚げ句、亡き騎士長の石像にまで改心を迫られるが意に介さない。ついに地獄に引きずり込まれて幕となる。

主な装置は2階建ての白い建物。19世紀英国のヴィクトリア朝の衣装をまとった人々が登場し、物語の進行に応じて建物が回転していく。特徴的に置かれた白い階段はエッシャーのだまし絵を思わせる。過去と現在、虚構と現実をつなぐようであり、舞台に線画の映像が投映されると、迷宮のような不思議な時空へ連れて行かれる。

映像デザインは、U2やエルトン・ジョンらミュージシャンの映像を手掛けるルーク・ホールズ。演出のカスパー・ホルテンは昨年、新国立劇場のオペラ「死の都」で日本デビューも果たした俊英だ。11年からロイヤル・オペラのオペラディレクターを務める。

日本公演はキャストをほぼ一新する。ドン・ジョヴァンニを歌うのはイタリア出身のイルデブランド・ダルカンジェロ。この役を得意とする現代屈指のバス・バリトンだ。ほかにもドンナ・エルヴィーラ役のジョイス・ディドナート、ドン・オッターヴィオ役のローランド・ヴィラゾンら第一線で活躍する豪華な顔ぶれがそろう。

オペラディレクター カスパー・ホルテンに聞く

複雑で魅力ある人物作る

「ドン・ジョヴァンニ」を演出するカスパー・ホルテン＝写真　ROH/Sim Canetty-Clarke

――「ドン・ジョヴァンニ」の演出に当たって心がけたことは。

「この演目には3つの出発点があった。第1に『誘惑』だ。この作品はよく思われているような性についての作品ではない。出会った女性を理解しようと奮闘し、物語を語って聴かせ、現実を変えてしまおうという、誘惑の過程の物語だ」

「第2はドン・ジョヴァンニの精神に潜り込んで複雑な人物になりきること。彼は別の人生を夢想して女性を次々誘惑する。『この女性とはどんな人生になるだろう』という具合に。まるで、いくつもの人生を並行して生きようとしているようだ。私はそこが理解できるし、死を受け入れまいとする姿にも共感する」

「第3はジョヴァンニが引きずり込まれる地獄をどう表現するのか。過去の数多くの上演は、炎で示してきた。だが、私は夜中に目を覚ましても、炎が怖くなることがあっても、炎が怖いということはない。本当に恐ろしいのは『人生に何の意味もなかった』ということだ。あらゆるアイデアと計画、野心、行動が消えうせてしまったら？　そして孤独に陥ったとしたら」

「ジョヴァンニにとっての地獄とは、誰もいないこと。これが非常に重要だった。18世紀の作品だが、彼の感情はまるで現代を生きる人物のようだ。物語のテーマは神からの罰だが、今日の我々はあまり神を恐れていないように思える。真の恐怖は罰してくれる神がいないことではないか。すべてが無になることが、現代の地獄だ」

――ジョヴァンニという人物をどのようにとらえるか。

「単に悪党として見るだけではつまらない人物になるだろう。ある意味、最も苦しんでいるかもしれない。彼の弱さや不安がわかる時がある。ほかの人間たちとの関係も描かないと、この作品はうまくいかない」

「例えば私は、ジョヴァンニが関わる3人の女性を、全く違うタイプにしたかった。ドンナ・アンナは父親にべったりの人生を変えてくれる男性が必要だ」

「ツェルリーナは様々な方法で人を操る。非常に精力的な野心家だ。現代にいたら、テレビ番組に出演して、セレブに会おうとするだろう。それからエルヴィーラは、ジョヴァンニを本当に愛しているかもしれない女性で、それが彼女の重荷になっている」

「私は皆を良い人間としても、悪い人間としても描いている。それぞれのキャラクターをより複雑なものにしようと努力した。彼らを人間的にすることに興味がある」

――最先端の舞台デザインに仕上がった。

「現代的なテクノロジーを使っているが、そのスタイルを見ると19世紀のものと分かる。例えば、映像に登場する文字はすべて手書きだ。セットも同様にクラシックで、マウリッツ・エッシャーや北欧の画家ヴィルヘルム・ハンマースホイに影響を受けている」

「ヴィクトリア朝の時代を選んだ理由は、性道徳に深く関わる作品を扱っているから。当時は性がひどく抑圧されていた。だからジョヴァンニがツェルリーナの手袋を外し、肌に触れるだけで、彼女にとっては性的な体験となる。誘惑の効果をいっそう引き出せるように、時代を設定した」

――日本公演のもう一つの演目は「マクベス」だ。

「ロイヤル・オペラが持つ異なる良さをうまく見せられるだろう。私たちはイタリアオペラの強い伝統があり、モーツァルト作品にも強みを持つ。世界クラスのキャストと我々が誇る合唱団を連れて行けることに興奮している」

英国ロイヤル・オペラ特集

＜予定される主な配役＞

▼「マクベス」（指揮＝アントニオ・パッパーノ）
マクベス＝サイモン・キーンリサイド、マクベス夫人＝リュドミラ・モナスティルスカ、バンクォー＝ライモンド・アチェト、マクダフ＝ディミトリ・ピッタス

▼「ドン・ジョヴァンニ」（指揮＝アントニオ・パッパーノ）
ドン・ジョヴァンニ＝イルデブランド・ダルカンジェロ、レポレロ＝アレックス・エスポージト、ドンナ・アンナ＝アルビナ・シャギムラトヴァ、ドン・オッターヴィオ＝ローランド・ヴィラゾン、ドンナ・エルヴィーラ＝ジョイス・ディドナート、ツェルリーナ＝ユリア・レージネヴァ、マゼット＝マシュー・ローズ

（注）掲載の配役は2014年12月１日現在の予定です。病気やケガなどのやむを得ない事情により出演者が変更になる場合があります。その場合、指揮者、主役の歌手であっても、代役を立てて上演することになっております。あらかじめご了承ください。出演者変更にともなうチケットの払い戻し、公演日・券種の変更はお受けできません。最終出演者は当日発表となります。

＜３月７日より前売り開始＞

◎演目／日程／会場／入場料

▼「マクベス」＝９月12日（土）、15日（火）、18日（金）、21日（月・祝）／東京文化会館（上野）／Ｓ券５万5000円～Ｆ券１万2000円の７種。開演時間は、12日と15日が午後３時、18日は午後６時半、21日が午後１時半。

▼「ドン・ジョヴァンニ」＝９月13日（日）、17日（木）、20日（日）／ＮＨＫホール（渋谷）／Ｓ券５万5000円～Ｆ券１万2000円の７種。開演時間は、13日は午後３時、17日は午後６時半、20日が午後１時半。

◎発売スケジュール

■２演目セット券（Ｓ、Ａ、Ｂ券のみ）＝３月７日（土）午前10時から日本舞台芸術振興会（ＮＢＳ）で受け付け開始。☎03・3791・8888。

■公演別Ｅ、Ｆ券＝３月14日（土）午前10時から限定前売り所で受け付け開始。

■公演別Ｓ～Ｄ券＝３月28日（土）午前10時からＮＢＳチケットセンター、ＮＢＳのＨＰ（http://www.nbs.or.jp/）ほか各プレイガイドで受け付け開始。ただしセット券で満席になった場合は、Ｓ、Ａ、Ｂ券が発売されないことがあります。

◎問い合わせ：ＮＢＳ☎03・3791・8888
オフィシャルサイト　http://www.roh2015.jp/

充実の布陣で 幻の王冠に挑む

音楽評論家　堀内　修

マクベスは王冠を求め、手に入れた。英国ロイヤル・オペラは、いま王冠を手に入れようとしている。ただし流血なしで。

オペラ・シーズンは、歌劇場が覇権を求めて競い合う季節でもある。今シーズンのメジャーリーグで優勝するのは、ミラノ・スカラ座かメトロポリタン・オペラか？ ウィーン国立歌劇場かバイエルン国立歌劇場なのか？ スポーツと違って、勝者がどこなのかは明確ではない。だが幻の王冠をめぐって、歌劇場は競い合っている。

ロイヤル・オペラの好調には理由がある。まず経済的な事情だ。絶好調ではないとしても、英国は文化の費用を削らなくてもなんとかなっている。次に現在のオペラの潮流が英国の伝統に合ってきていることも大きい。オペラといえばまず声で、舞台は二の次だった時代が終わり、上演は歌の品評会からドラマと音楽の総合芸術になっている。シェイクスピア以来、演劇の伝統を育んできた英国の歌劇場は、待ち望んだ季節を迎えている。

そこにアントニオ・パッパーノが加わった。ブリュッセルのモネ劇場やバイロイト音楽祭で才能を発揮したパッパーノは、理想的オペラ指揮者というべきだろう。5年前の来日公演では、パッパーノがマスネの「マノン」を指揮した。確かに大スター、アンナ・ネトレプコのマノンがすばらしかったのだが、それを支えた、というよりあおったのが、パッパーノの指揮だった。甘美なマノンの誘惑は、ソプラノとオーケストラが手を携えて実行されたのだ。

パッパーノが指揮すれば、舞台で何が進行しているのか、聴き逃す恐れはない。マクベス夫人が暗がりからぬっと現れれば、管弦楽は聴く者の背筋を寒くさせる。ゾッとさせるのも気持ちをとろけさせるのも、思いのままなのではないか。そんなオペラ指揮者パッパーノの力量が、現在のロイヤル・オペラの上演の質に直結している。

英国を代表するバリトンのサイモン・キーンリサイドがマクベスを演じる＝写真　ROH/Clive Barda,2011

英国が育んだ理想の姿

ヘンデルの時代から、ロイヤル・オペラは大英帝国の首都のオペラの中心だった。長いあいだパリやウィーンやミラノと並んで、オペラのメジャーリーグというべき一団に属していた。だがいつも好調だったわけではない。バレエは一流だがオペラは一流半くらい、という時代だってあった。

いまは違う。王冠に手がかかっているのではないだろうか？

今度の日本公演で上演されるモーツァルト「ドン・ジョヴァンニ」は、ロイヤル・オペラのオペラディレクターで、いま一番勢いのある演出家でもあるカスパー・ホルテンが演出し、パッパーノが指揮する。幕開けの、情事と殺人が続けて起こる緊迫した場面で何が起こるか、オペラ好きならきっと期待する。ドン・ジョヴァンニを歌うイルデブランド・ダルカンジェロへの期待だけではない。緊張感を生み出す演出家への期待でも、遠慮無く劇的な力を奔出させる指揮者への期待でもない。現在の英国ロイヤル・オペラへの期待だ。

演技に定評のあるバリトン、サイモン・キーンリサイドがマクベスを歌うのは、ロイヤル・オペラなら当然というべきだが、ジョイス・ディドナートやローランド・ヴィラゾンらをそろえた来日公演のメンバーは、この歌劇場の現代の充実を物語っている。リュドミラ・モナスティルスカのおっかないマクベス夫人の背後には、王冠をうかがうシェイクスピアの国の歌劇場がいる。

ロンドンのロイヤル・オペラ・ハウス＝写真　ROH/Peter Mackertich

舞台の進化 場所を超える

アレックス・ベアード総支配人に聞く

写真　ROH/Sim Canetty-Clarke

——ロイヤル・オペラの決定的な特徴とはなにか。

「様々なレパートリーが混在する。その幅広さだ。それから音楽を指導しているのがアントニオ・パッパーノだということ。彼は間違いなく、現代最高のオペラ指揮者。想像力豊かで野心と才能もあり、芸術上のリーダーシップを発揮してくれる。オーケストラ、合唱の歌声の質は圧倒的だ」

「今、若い世代がロイヤル・オペラを演出している。カスパー・ホルテンはこの規模の歌劇場のディレクターとしては40代前半と非常に若い。彼はプロデューサーやアーティストたちの世代と調和しており、舞台での表現に良い作用をもたらしている」

——前回の日本公演から5年。この間、ロイヤル・オペラではどのような変化があったか。

「テクノロジーが大幅に進歩したことが大きい。5年前に東京に住んでいたら、ロイヤル・オペラを体験するのは非常に困難だった。それが今ではライブビューイング上映を通して、映画館で私たちのオペラを見られる」

「今回の『ドン・ジョヴァンニ』を通して分かるように、舞台でテクノロジーが果たす役割が進化している。以前にも作品にプロジェクションマッピングを採用することはあっただろうが、今回の公演で目にするものは比べものにならないだろう」

「だが変わらないものもある。ロイヤル・オペラの個性、懐の深さ、音楽的価値は全く変わらない」

——ライブビューイングなど、技術革新を生かした取り組みはどの程度重視しているか。

「大いに重視している。私たちのホールにある座席数はたった2400だが、何十万人もの人々が作品を見られるようになれば、それだけ多くの人々の暮らしが豊かになり、彼らの世界観さえも変わる。私たちには今、それを実現する手段がある」

「最高の舞台に触れる機会を広げ、さらには『本物を体験したい』という欲求を喚起できる。舞台芸術への関心を高める最高の手段だ」

日本経済新聞　２０１５年（平成27年）２月21日（土）朝刊掲載
（日本経済新聞社利用許諾番号３００３９８２１　日本経済新聞社が利用を許諾しています。）